「日印の懸け橋　木村龍寛」

我妻和男 著
我妻絅子 訳

木村龍寛は、日本の福井県武生市で、一八八二年に生まれた。氏は一八九三年同市の小学校での勉学を終えて、或る塾に入った。そこで勉強して、氏は仏教に沙門として入門した。それから一九〇四年まで京都と大阪で、日蓮宗のいろいろな研究機関で、研究と瞑想を行った。一九〇四年東京に行って氏は、正則英語学校に入学した。そこで二年間英語を学んだ後、氏は一九〇六年東洋大学に入学した。当時氏は或るお寺の僧侶にもなっていた。仏教と日蓮に対して氏の尊崇と献身ははかり知れなかった。氏は年令はまだ若かったが、世俗の信者たちの間で多くの人々が氏の高徳を見て感動していた。彼等は氏を心の裡から尊敬し支持していた。東洋大学に入学してから、氏の心の中にインドに行く望みが形づくられ、それが次第に強くなっていった。氏は仏教の真の意味、教理や教義について知識を集めなければならないとしたら、サンスクリット語とパーリ語を学ぶことが必要であり、サンスクリット語とパーリ語を学ばなければならないとしたら、インドに行くことがどうしても必要である。それから日蓮宗が氏をインドに送った。インドに行く前に、氏の檀家の人々は皆で氏に対して盛大なお別れ会を催し、出来る限り経済的援助をしてくれた。木村龍寛は大変張り切ってインドに向かって、最初チッタゴンに向かって出発した。チッタゴンに当時から現在に至るまで仏教社会が存在している。そこで氏は仏教を知りたいと思ったら、そして仏教の研究をするなら、チッタゴンがそのふさわしい場所だと考えた。そこで木村龍寛は一九〇八年にインドに行った。

氏は大乗仏教を学ぶために、サンスクリット語と小乗仏教を学ぶために、パーリ語を学ぶ決意をした。そこで氏はサンスクリット語を学ぶために、チッタゴンの或るサンスクリット学校に入学した。そこで三年サンスクリット語を学び、氏は一九一一年にカルカッタに行かれた。チッタゴン滞在中、氏は日夜精一杯勉学された。こうして氏は仏教哲学、仏教戒律、サンスクリット語、パーリ語を深く研究された。そしてチッタゴンの仏教徒たちと氏は深く交われた。そこで氏は、ベンガル語はおろか、チッタゴンの方言さえも自分の母国語のように喋ることができた。ベンガル人たちを氏は大変愛され、ベンガル人の生活を氏は心から受け入れ、いわば、ベンガル文化の中に氏はすっかりひたり込まれた。木村龍寛は身体的、精神的に耐え難い困難に耐えることができた。木村龍寛の誕生から二十五年の中で、氏の父は繰り返し九回離婚した――このため木村氏の心は或る言い知れぬ、そしてはかり知れない苦悩に、常に信じ難い程苛まれていた。氏は深い研究と修行に心を集中して、その苦悩を軽くするように努めた。そこで、遠い日本から行ったにも拘らず、異国のチッタゴンで、氏はどうにか精神的苦痛を感じなかった。むしろ内面の深い喜びを味わった。日本から氏はチッタゴンの港に着いて、長い船の疲れをとるために一寸休息していると、チッタゴンの人々が、「輝かしい東の方から今日一人の若いお客様が来た。」と言いながら、氏に心からの歓迎の意を表した。

チッタゴンに滞在中、一人のベンガル人が木村にベンガル語を教えた。そして木村はそのベンガル人に日本語を教えた。即ち言葉を教える交流が行われた。氏の言語を学ぶ意欲が強かった。前述のベンガル人と氏は、日夜ベンガル語の練習をした。氏は決して前述のベンガル人を離さなかった。そのベンガル人は後にカルカッタ大学のパーリ語学科長になられ、国際的で有名な仏教学者ノリナッコ・ドット博士であった。一九六七～七一年、私がタゴール国際大学にいた時、カルカッタでドット博士と一、二回お会いした。その時ドット博士は私に言われた――チッタゴンで氏は木村龍寛氏にパーリ語を教えた、と。氏は言われた。「木村龍寛氏は私の大変優秀な学生でした。パーリ語は十分進歩していました」と。

チッタゴンでは、木村龍寛氏について、非常に多くの逸話が残っている。その中で、美しい逸話をここに引用する。

木村龍寛は、チッタゴン仏教協会の会長、大学者ドルモボンジョ老師に、約三年間仏教を学んだ。事件が起こったのは、市の

エナイェト市の仏教寺院のすぐ近くの道でであった。チッタゴンの当時の支部のコミッショナー・グループの英国人が毎日手に杖を持って、朝一廻りしていた。氏のこの毎朝の一廻りの時道で氏を見たら、誰でも道を離れてよけなければならなかった。或る日、上記の支部のコミッショナーの氏が規則に則った日々の朝の巡回に出かけていた。木村龍寛も朝の巡回に出かけ、反対方向から同じ道を通ってやって来た。英国のコミッショナーの高慢な性向を木村は知らなかった。そこで道をよけない罪で、コミッショナーがとてつもなくかっとして、木村を杖で打ち始めた。コミッショナーのこの残酷な行いに、木村も著しくかっとして、すぐさまコミッショナーの手の杖を強く掴んで立った。回りに居た人々はこの光景を見て、当惑してじっと見つめていた。かっとした木村龍寛は、このあるまじき行いに対する不当な決定に対して、激しい言葉で抗議した。どうしようもない状況を見て、遂にコミッショナーは恥じて、木村に許しを乞わざるを得なかった。その日木村は、日本人の伝統的衣裳である着物を着ていた。それで余計に氏は皆の目についたのであった。その日チッタゴンの人々は、一つの独立国の国民のこの御し難い勇気と気力を見て驚いていた。このニュースは後日チッタゴンの日刊紙を通して広く広がった。従って木村龍寛はチッタゴン在住の全ベンガル人に、勇敢な尊敬を得た。ベンガル地方の当時の有名な人、カルカッタ高等裁判所の首席裁判官で、カルカッタ大学副学長アシュトシュ・ムコッパッダエ氏は、独立国の国民木村龍寛氏の計り知れない勇気の物語を知ることができた。その少し前、ベンガルの大地で、民族主義者のベンガル人たちがイギリスに対して、ベンガル独立の運動を始めた。このために、木村龍寛の英雄的なこの例を、独立を望むベンガル人たちは大きな理想として受け入れていた。この出来事は、日本の或る出版社の加瀬氏のところで、又カルカッタのベンガル仏教協会の元事務局長ニルモルチョンドロ・ボルワ教授の口からノリナッコ・ドット博士の家で聞いた。ニルモルチョンドロ・ボルワ教授は大学者ドルモボンジョ・モハストビルの甥である。

木村龍寛は仏教の重要な第一教義「無明」について研究するためにインドに行ったのである。氏はチッタゴン滞在中、サンスクリット語、パーリ語、ベンガル語を修得していた。これ以外にも氏は無明の真の深い心境を同時に研究及び追求した。仏教哲学について、木村の無限の熱意の情報がアシュトシュ・ムコッパッダエの耳に届いた。遂に氏は、木村龍寛にカルカッタに来て

勉学するように招待した。

木村龍寛は三年以内に、即ち一九一一年にチッタゴンのサンスクリット大学の勉学を終えて、その年にカルカッタに行って、カルカッタ大学で東洋研究科に入学した。そこでも氏は三年に亘り模範的に勉学をした。即ち、一九一四年にカルカッタ大学での氏の勉学は修了し、その年に氏はアジア協会の会長モハモホパッダエ・ホロプロシャッド・シャストゥリ氏のところで、仏教サンスクリットと古代碑文の研究に加わった。

木村龍寛は一九一五年に、インドの東ベンガル・サンスクリット協会から「優秀学問賞」の学位を受け、氏は氏著の仏教についての著「中級スートラ哲学」によって、ベンガル協会から金賞を得た。その年即ち一九一五年に世界詩人ロビンドロナト・タゴールの依頼で、木村は日本に行った、日本での詩人歓迎のために。しかし遂に詩人はその年日本に行くことができなかった。その次の年詩人は日本に行かれた。従って木村はかなり長い間日本に行かなかった。そうこうしているうちに一九一六年日本の東京大学で氏は、「ウパニシャッド哲学の研究」に関する一冊の重要な論文を書いて、上記大学の講師の職を得た。その職に就いてしばらくして氏は、一九一七年日本の日蓮宗の派遣で、仏教の更なる研究のために再びインドに行く。この度はインドに行ってすぐに、モハモホパッダエ・ホロプロシャッド・シャストリ氏に従って、「現代インド仏教の歴史」について研究を始めた。一九一八年オシュトシュ・ムコッパッダエがカルカッタ大学で、大乗仏教と古代インドの仏教史を教えるために、仏教学者ベニマドブ・ボルア博士と木村龍寛を就職させた。

一九一八年から一九二六年まで八年間の長い間、木村はカルカッタ大学のパーリ語学科の修士コースで教鞭をとられた。それと同時に大学で日本語も教えた。そして小乗と大乗仏教の比較研究も教えた。

当時いろいろな催し物で講演するために木村龍寛を招き、氏について新聞にもそのニュースが印刷され始めた。氏はあらゆる類の人々と容易に交わることができた。そして普通の人を初め、学者グループ、学生から始めてすべての人々に、いろいろな魅力的な講演をした。大王でさえも木村龍寛を尊敬して、象の座に坐らせて、講演のために連れて行き、大勢の人々の面前に、氏

の講演の手配をした。

他方、知的な日本の学者、画家、仏教の僧侶と学生たちがインドに行ったが、彼等全員を氏は常に良く推薦して、いろいろな形で援助していた。こういった人々の中には、後に東京大学のインド哲学科の高楠順次郎教授、チベット語の教授多田等観教授を初め、多くの優秀な人々がいた。木村龍寛はカルカッタで全部で約十三年教えられた。当時仏教の大乗、小乗、ヒンドゥー教について深く研究された。そして多くの著書や研究書を書かれた。

当時カルカッタには仏教伝道の二つの中心があった。一つはベンガル仏教協会で、もう一つはモハーボーディ・ソサイティであった。ベンガル仏教協会の創設は一八九二年で、モハーボーディ・ソサイティの創設は一八九一年である。二つの創設者クリパショロン・モハストビルとオナガリク・ドルモパルの間には十分な友情があった。クリパショロン・モハストビルの疲れを知らない精進によって、そして団体全体の援助でボウバザル地区に、一九〇三年カルカッタの最初の仏教寺院「仏教の最初の寺院」が建設された。木村龍寛は一九〇八年から一九二三年の間、ボウバザル警察のすぐ近くにあるベンガル仏教協会の寺院のいろいろな催し物や仏教の規則や儀式に基づいた会合に度々出席していた。氏はカルカッタ大学の近くのハリスン通りに住んでいた。

オシュトシュ・ムコッパッダエ卿と木村龍寛（右から一人目）オシュトシュの右に河口慧海と左側に沙門プンナノンドが見られる。後列に他の人々の中に、シャムプロシャド・ムコッパッダエとプロボドチョンドロ・バグチがおられる。

当時、ベンガル仏教協会の創立者クリパショロン・モハストビルの心地よい待遇によって、アシュトシュ・ムコッパッダエ卿、ショティシュチョンドロ・ビッダブション、ゴゴネンドロナト・タゴール、オボニンドロナト・タゴール、チャルチョンドロ・

ボシュ、モハトマ・オナガリク・ドルモパル、ケットロナト・ボンドパッダエ、ボグラル・ノバブ・アブドゥシュ・ショバン・チョウドゥリ、ショッテンドロナト・タゴール等、ベンガルの更に多くのインテリや学者がドルマンクル寺院に出入りしていた。一九一一年、一九一三年、一九二二年の印刷された年報で、私はベンガル仏教協会に木村が出入していた証拠を得た。そのいくつかの例をここに引用する――

木村龍寛はベンガル仏教協会の名誉会員で、協会の機関誌「世界の光」の筆者だった。一九一一年から木村はカルカッタにいた。

一九一一年の十月八日、ベンガル仏教協会の十九回目の年会で、モハッタ・アナガリク・ドルモパルが議長をつとめた。上記の年会の時、極めてすぐれたショティシュチョンドロ・ビッダブション博士が言った。「この協会の四人の若者がパーリ語でM・A・を取得した。このことは少々の進歩のことではない。そしてこの四人は、私の生徒、即ち私にとっても誇るべきことだ。今休暇中で、学校、カレッジ、それから裁判所も全部が休みだ。その上、そうした人たち（学校の関係者）が人集めに奔走したというわけでもないのに、今日の集まりに来ていない者は誰もいない。あらゆる階級のあらゆる団体の人々がここにはいる――スリランカ、日本、中国、ビルマ人がここにいらしている。ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、ジャイナ教徒、仏教徒など、あらゆる種類の人々がここに集まっている。多くはスリランカの良い子供たちがオナガリク・ドルモパルと一緒に来た。日本の僧侶、木村龍寛がここにおられる。この人たち全部を、一つに結びつけたのは誰か。その如来仏陀を私は貴方がたに何度も何度も言った――インドで二つの主な宗教が生まれた。一つは国家宗教で、それはヒンドゥー教で、もう一つは普遍的な宗教――それは仏教である」

一九一三年の年報の二十二、二十三頁に――「二月二十日午後五時に、ドルマンクル会の建物で、おめでたいマグ月の満月の時、ベンガル仏教協会の一大集会が召集された。この集会の時に、いろいろな国の仏教、ヒンドゥー教及びその他の団体の多くの紳士が出席していた。外国の仏教徒の中に、スリランカから来たシッダルタ老師、フランスから来られた女性スジャニ・カーペレ

ス、日本から来た木村龍寛、シッキムから来たドションドゥプの名を特に挙げるべきである。

その会合で木村龍寛氏が言われた――仏陀は死なれた。本当に亡くなられたのか。食物で養われ、生き生きとして精神的な等五種類の宝がある。仏陀が捨て去られたものは、他方では宝である。天は指示を出して行かれた。この世は無常であると。仏陀の命がけの、（英叡）知に満ちた喜びの宝が永遠なのだ。有能な学者ビドゥシェコル・シャストリ氏はマグ月の満月の日に、仏陀がすべては無明であると示された（そのいくつかの部分を）非常に美しい言葉で説明された。仏陀は更に言われた―仏陀が易しく仏教を広められたように、多分この世で誰もそうしていない。仏陀の法は「来たれ、見よ」仏陀の法の最初に幸福、真中で幸福、終りに幸福。涅槃と魂の解放との間には何の違いもない。大いなる魂の解放は唯重要性を表す言葉だ。渇きのない魂の解放。

一九一〇年から一九二〇年の間で、カルカッタに在住の日本人の数は、五〇〇人から一、〇〇〇人位であった。当時、木村龍寛のように学識のある日本人がカルカッタに住んでいて、カルカッタ在住の日本人たちにとって大変助けになった。このために、木村のことを友情の真の懸け橋であると言うことができる。

タゴールと木村龍寛

私が前に述べたのだが、チッタゴン滞在中に木村はベンガル語とチッタゴンの地方語をかなり身につけていた。一九一一年氏はカルカッタ大学に入学した。当時からジョラシャンコを度々訪れ始めた。こうして氏は大聖ロビンドロナトと親しくなることができた。未だ詩人はノーベル賞を得ていなかった。そして世界的に有名にもなっていなかった。この頃から木村はタゴールからベンガル語を学び始めた。或る時氏は私に言われた。「タゴールの話し方は詩のように韻律をもっていて、とても耳に心地よかったです。タゴールの物事を言う内的な調べは内面を向いている魅力的な力に満ちていて、強い高い想像力から生まれていました。私は常にジョラシャンコで大聖のところに行ったものでした。大聖は私にいろいろな形でベンガル語を教えて下さいまし

た。このような最高の幸せは多分、他のどの日本人も得られなかったでしょう。」この言葉で分るように、タゴールは木村をどれ程愛していたことか。木村がベンガル語を学ぶ熱意が詩人を特別に感動させたのだ。

一九〇二年に岡倉天心がカルカッタに来て、タゴール一家と文化的交流の役目を始められた。一九〇一年創設されたシャンティニケトンのブランモ学校に、一九〇二年岡倉天心が学生堀を最初の外国人学生として送り、この文化的関係が始まった。実際この後から、インドと日本の文化的関係が深くなっていった。特にベンガルの大地でインドの独立運動が始まった後からインドの独立獲得まで、この長い時の中でインドに行ったすべての日本人の数は数千人になるだろう。これらの人々の中でベンガル語を誰よりもよく書き、読み話すことが出来たのは木村龍寛である。多分このためにもタゴールが木村を大変愛し信頼していたのだ。その証拠が得られるのが、タゴールの日本訪問に関しての木村龍寛の役割である。

二十世紀の初め頃詩人は日本に来たいという意志を表されていた。遂にタゴールは、一九一六年、一九一七年、一九二四年、一九二九年に二回、即ち全部で五回日本に来られた。事実タゴールは、一九一五年に日本訪問の計画と努力をされた。

「シライドホに行く前に詩人のさすらいの時、心が日本の方に一度傾いた。シライドホに着いてアンドルースに、七月十六日に書いた――「私は汽車の中であなたに、私の日本への提案されている訪問を知らせる手紙を書きました」タゴールは氏の特別の知り合いの日本の画家横山大観と連絡をとり、日本に行くことをはっきり決めた。この知らせを聞いて、日本の多くの人々が詩人の訪問を待ち望んで、喜びに溢れ始めた。当時タゴールの紹介について、多くの種類の作品、氏の作品の翻訳さえも、日本の雑誌や新聞に掲載された。

――――――

タゴールの手紙（1）

カルカッタ

拝啓

貴殿の一月二十八日のお手紙を頂きました。日本に私達が滞在中に、一人私達の助力者が必要となるでしょう。それで貴殿が私共といて下されば嬉しいのですが。

日本の船でもし私共が行くことになれば、貴殿の船賃は二〇〇〇ルピーで、他の船だと二流の船賃を上げることは承知しています。日本に貴殿が私共と一緒にいて下さる限り、貴殿への援助と他の出費のために、月に一〇〇ルピー上げることに決めました。

ここで一つのことをはっきりさせて言うことが必要です。貴殿を何日私共と一緒におくことができるかそのいつかを示すことはできません。それは私の力と都合によるでしょう。私のこの提案にもし貴殿の同意があれば、私に至急知らせて下さい。（以上

一三二一年マグ月）（※ベンガル暦）

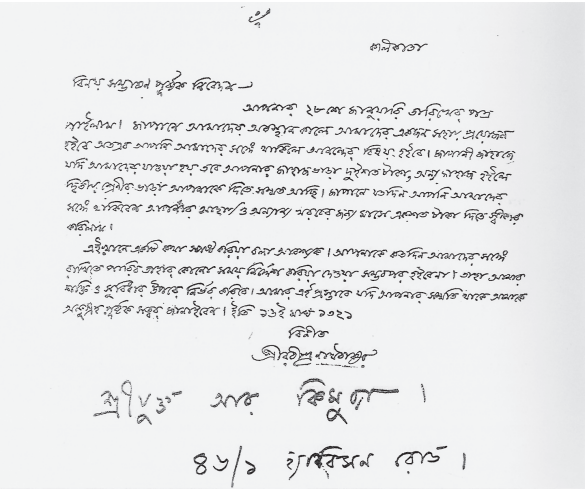
敬　具

ロビンドロナト・タゴール

木村龍寛様

四六／一

通り



木村龍寛に書かれたタゴールの手紙

それから木村龍寛がタゴールの依頼で、詩人の日本訪問の日程を準備するために、一九一五年に日本に戻って来た。日本に来て氏は、タゴールの歓迎の準備のために、いろいろな場所で走り廻った。そうこうしているうちに、詩人が日本を訪問するニュースがあらゆる場所で聞こえていたことを私は前に述べた。

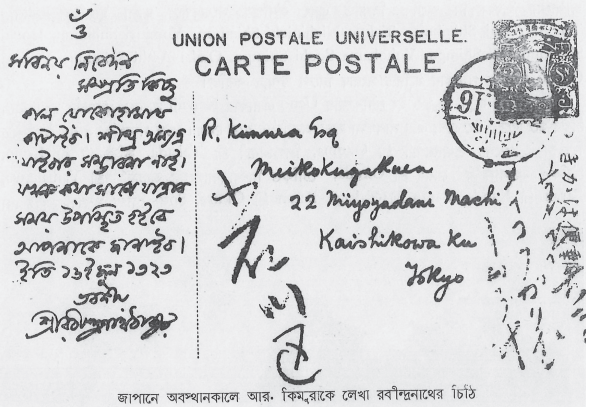
しかし残念なことに、一九一五年タゴールの日本訪問がいろいろな理由で止めになった。しかし翌年即ち一九一六年に詩人の夢が現実のものとなる。一九

一五年に木村の十分な余暇があった。一九一六年に自分の研究などの仕事で、氏は限りなく忙しかった。それにも拘らず木村は、日本でタゴールの訪問の予定のために、十分な困難を認めていた。しかし氏は、タゴールの三ヶ月に亘る日本訪問中、常に詩人と共にいることができなかった。しかし詩人は、時々木村に手紙を送った。大聖は日本の横浜に滞在中、東京にいた木村龍寛にこのような手紙を送った。

―――

オーム

拝啓



জাপানে অবস্থানকালে আর. কিমুরাকে লেখা রবীন্দ্রনাথের চিঠি

日本滞在中に木村龍寛に当てたタゴールの手紙

最近少しの間横浜に滞在しよう。至急他の場所に行く可能性はないのです。数ヶ月たって旅行する時になったら、貴殿にお知らせしましょう。敬具　一三二三年六月十六日

タゴール

木村龍寛様

東京都小石川区茗荷谷町二十二

明光学園

―――

岡倉天心の新美術運動の後継者たち、即ち横山大観を初めとする画家たち、仏教寺院の上位の特別な人々と大学の教授等、有名な老いた人たち、皆でタゴールを歓迎したのであった。大詩人タゴールのために準備された上記の大歓迎会に、木村龍寛は自ら進み出て講演する機会を得なかった。なぜなら氏は、他の人々と比べてずっと若い、たった三十三歳の若者だった。木村はたった二つの歓迎会で詩人の講演の通訳をした。これ以

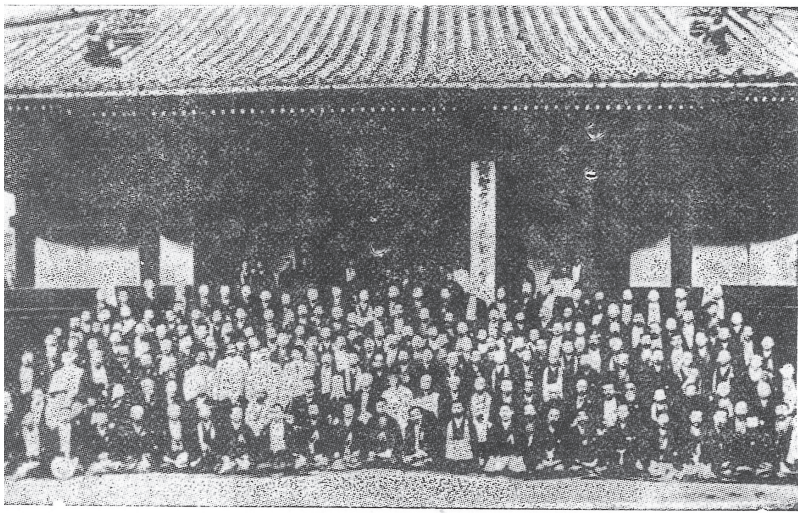
外には氏は、日本人たちとタゴールの個人的な会見の時に通訳の役を果したものだった。大抵氏は、詩人の背後からもいろいろな手配をした。タゴールはいろいろな時英語で講演をされた。しかし日本には、英語で講演をする習慣が、当時それ程なかった。特にタゴールの文学的、哲学的思想や情感に溢れた英語で述べられる講演は、日本語に翻訳する通訳者は大変当惑したものだった。情況を理解することができて、タゴールは木村に言った――

「私はベンガル語で講演をしたい。もしそうなれば、私の母国語の鼓動を君はそのまま日本語に翻訳したまえ。それによって二国の思想の交流が行われるだろう。」

日本で大詩人タゴールに、日本人たちがどれ程心から歓迎を表したか、それについての一つの情報を示した。

一九一六年の六月一三日、東京の上野地区の大変有名な歴史的な寛永寺で、大聖タゴールの大歓迎会が催された。上記の歓迎会のニュースは日本の当時の多くの有名な、そして人気のある新聞に印刷された。例えば東京朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞、報知新聞、時事新報、横浜貿易新報、大阪朝日新聞、萬朝報などの新聞に印刷されたニュースを下に引用する。

「一九一六年六月十三日東京の上野地区の寛永寺で、大詩人ロビンドロナト・タゴール氏のために歓迎会が行われた。上記の歓迎会に出席された人々――日本の首相大隈氏、文部大臣高田氏、農林大臣甲野氏、東京市の市長奥田氏、東京大学総長山川氏、神田男爵、高木男爵、大倉男爵、曹洞宗石川禅師、日蓮宗法主藤原師、大正輪王寺住職村上博士、上田博士、天野博士、富士川博士、田中博士を初め仏教とキリスト教の多くの代表的な人々、有名な画家や芸術家たち、学者グループ、実業家たちが全部で約二一八人の人々が、その時歓迎会に出席された。これらの人々の中の何人かは、仏教の公式の服装、そして何人かは伝統的日本の服装を身につけていた。そして一部の人々は赤、そして紫色に



日本での大詩人タゴールの歓迎会の写真
（一九一六年六月十三日　東京上野の寛永寺の正面で）

染められ、白の水蓮で自身の胸を飾られていた。

タゴールと共にインドから来られたアンドルース氏、ピアソン氏、ムクル・デ氏がいた。その方たちは馬車に乗って歓迎会に来られた。タゴールは頭に赤紫色のトルコ帽をかぶっていた。それで氏をとても美しく、神聖に見せていた。詩人の片側に日本の大隈首相、もう一方の側に仏教の禅宗の日置禅師がおられた。歓迎会に出席された他の特別な人々も、きちんと決められた席に、全体の写真を撮るために坐られた。大詩人タゴールの顔付と様子を見るために、寛永寺の正面の入口の扉に向かって無数の学生たちと市民たちのつめかけ、大騒ぎとわいわいが起っていた。それから、舞台に掛けられた二つの古代中国の聖人の写真の真中に、タゴールが、氏のために定められた大座に坐られた。舞台の上の、木蓮の花で飾られた大きな花瓶が美しかった。東京大学の印度哲学科の教授で歓迎会の会長高楠順次郎博士が舞台に立って、上記の歓迎会の開会を宣言した。それから、古くからの知識のある河瀬秀治氏が舞台に上って講話を述べた。――「仏教という言葉を発音すると共に、私の心に浮かぶのはインドです。古代において日本の皇子、聖徳太子が大乗仏教を政治の基盤として受け入れました。従って仏教の美しい諸々の律の中心に入って、今日迄も私達の生の流れに、連続的に漂っていました。」それから日置黙仙禅師が言われた。「タゴールの思想は仏陀の思想と十分共通点がある。」それから氏は、黒い漆塗りのお盆の上に敬意を表す記念の贈り物として、七宝焼の花瓶を詩人の手に渡された。上記の大切な贈り物をタゴールは手を合わせて、丁重に控え目に受取った。そ

の意外な光景を見て、歓迎会に出席していたすべての日本人は興奮した。少ししてタゴールは舞台の上に立って、先ず皆に深い感謝を述べて、直接ベンガル語で氏の講演を始められた。氏には、せわしさが全然なかった。講演の中には平和な思想と韻律の響きがあった。氏の美しい声が水の流れや歌のように聞こえていた。それを聞いて、出席していた聴衆は皆魅惑されてしまった。特に総理大臣大隈卿と東京大学学長山川博士の人間的な情感で、二人の眼から涙が流れた。タゴールのベンガル語で述べられた講演は、その日日本語に通訳したのは木村龍寛であった。氏は長くインドで教鞭をとられたのである。通訳の役目で、木村の流暢さは称賛に値する。タゴールは言っておられた。「太陽の昇る国にこの度初めて私は来ることができた。神戸市の港に私は船から降りた。ここで西洋式と日本式の交ざった家に気がついた。それがあることと、天候に日本の特質の欠如を心にとめた。それを見て思われたのは、巨大な身体を持った大蛇が大口を開けて、すべての人間を呑み込んでいる。同時に私には次のことも思われた。即ち、日本がこれ程物質文明の国で、この国に私は来なければよかった。また汽車で東京に来る途中で静岡駅に汽車が止まった時、仏教信者の人々が最高に尊敬して、お線香、花環で私共に歓迎を表された。それと同時に私は本当の日本を感得し、理解することができた。私が東京に着いた時、私には思われた——東京に住んでいる人々の習慣はすべて詩のようで、私は花の咲いている桜の木々の中にかくれてしまった。ここ数日、日本固有の美しさを見て、私の心は満ち溢れた。それらの生命の溢れた歓迎に私は大変ためらいを感じた。このことが唯一仏陀のために可能になったのだ。このために私は貴方がたみんなに深い感謝を捧げる。これ以前に私は数回西洋にも行った。その国々は非常に物質主義の国だ。そこで私はお金と力の影響しか他のものは何も見なかった。日本は永遠の愛の流れの中に生まれた一つの美しい世界だ。そこで私は詩人としてこのような高い座を得た。ここの子供たちや男の子、女の子たちの遊びやスポーツや大人の道を歩く調子を見て、私ははっきり理解したのだが、この国は宗教と愛の想いで満たされている。何よりも私たちは古い日本と新しい日本を見なければならない。私はしつこく心から祈るのだが、現在の新しい日本人たちが古い日本を忘れないように。現在の日本がもし古い日本を失うなら、日本はどうにもならなくなる。唯単に力で決めるなら——人間の力より馬や牛を初めとするものの力は遙かに多い。正しいことは私達は自ら生き生きと

していなければならない、そしてきちんと悟らなければならない。人間として生命のない力よりも精神的な力はずっと強力である。私は信じているのだが、日本固有の文明は今日東洋と西洋の文明の結合の方へ進んでいる。私はこの輝かしい東洋の国の日光が次第次第に西洋の国をも輝かせるように。その光を期待して私は、日夜手を組んで待っている。このことを聞いて、歓迎会に出席した聴衆は、何か一つ輝かしい光のサインを得て喜んだ。

それから大隈公が講話の中で言われた。「大詩人の声の中で、私達は特別素晴らしい天国のような環境を感じた。しかし氏の言葉は通訳以外は理解できない。しかし氏の話は私達の心の中に日本の大僧正の説教よりも霊感が増す。この大詩人の忠告は、現代の日本の規律のない思想に或る類似性を斉らすことができる。その中で私共の国の民族的人間性は、詩のように韻律を伴った、或はタゴールの詩と容易に一つになるだろう。大詩人の甘い繊細な言葉の中に私は大いなる情感を味わった、そしてタゴールの話が私は大変気に入った。」大隈氏の長い講演の後で高楠博士が言われた。「大詩人タゴールの詩と文学の影響が長い間百人に及ぶ日本人の心の中に人生の理想となるでしょう。数日前に東京大学で、タゴールの講演を聞いて、数人のイギリス人とアメリカ人の学者が称賛して述べられました。『タゴールの声の音色を聞くと水晶の板の上に真珠が散らばっていて、タゴールの言葉を聞くと一つの大いなる詩の本のようだ』と。しかし私にも全くそのように思われる。歴史的視点から想像するならば、二、三千年昔のインドの大詩人と私は話をしているように思われる。タゴールは私共の大学で『インドの日本へのメッセージ』に関して講演をされた。氏はその時次のようなことを言われた。『本当のことを言うと私はこの講演の真の演題は〝世界の国々への日本のメッセージ〟であるのが正しかった。このことを私はインドの代表として言っている。』タゴールのこの大事な言葉の真の意味を私共は理解しなければならない」

その日非常に優秀に、木村龍寛が通訳の役目を果して、タゴールは大変満足して喜ばれた。その時から木村に対するタゴールの愛情と信頼が更に深くなった。ベンガル語で木村の優秀さと、彼に対するタゴールの愛情を見て、歓迎会に出席している日本人たちは驚いた。

私は前にも述べたが、その一年後即ち一九一七年に、木村龍寛は日本からカルカッタに戻った。そして研究と教授の仕事に従事された。タゴールと木村は常に連絡があった。このことと共に或る出来事のことをここで述べる。

一九二一年にタゴール国際大学が創立された。一九七〇年にシャンティニケトンのタゴール国際大学に私が在職していた時、タゴール国際大学の元の学生ホリロンジョン・グホ氏が私に言われた――「タゴール国際大学の開校式に、カルカッタ大学の教授として、木村龍寛がシャンティニケトンに行って五、六日留まった。その時氏は日本の僧たちの伝統的衣を着ていた。そのことがすべての人々の視線を引きつけた。夕方催し物の時出席したすべての人々の面前に、カルカッタ大学の代表の教授木村龍寛が、タゴールの詩集「Balākā（『渡り飛ぶ白鳥』）」の下に書いた部分の詩を暗誦された――

『今度（このたび）　ほら、すべてを破壊するものが
　　やって来た
苦しみの洪水が呼びかけた
大声に泣き叫ぶ声に浮かんで行く』

朗詠を氏は暗誦し、はっきりと述べることができた。そこでタゴール国際大学の開校式のおめでたい日に出席したすべての人々が一つになって、大拍子をした。タゴール自らもその日木村のベンガル語の詩の朗詠を聞いて喜ばれた。その魅力的な光景が今でも私の目前にはっきり浮かぶ」

木村龍寛の詩の朗詠が大いに称賛された主な理由は、氏がタゴールのところで多くの詩の暗誦を学んだからである。

木村はカルカッタ大学で更に数年教えた後日本に帰国した。日本で立正大学で仏教について教鞭をとるために就職され、一九五五年迄氏は立正大学のいろいろな学部の行政的任務にも就かれた。仏教の教授のほかに氏は、布教及び奉仕の仕事をされた。

この他にも氏は上記の立正大学で、仏教哲学の他のインド哲学も教えられた。

第二次世界大戦の時、木村龍寛は、インドでの独立運動の時、ネタジ・シュバシュチョンドロ・ボシュを十分援助された。ネタジが日本に滞在中、ネタジの通訳の役目を果した。

一九五六年十一月インド政府が準備した二五〇〇年仏陀生誕祭のために、多くの仏教国の学者グループの多くの会員の一人として、氏は招待された。その時日本の代表として、中村元博士を一緒にお連れして、木村龍寛も最後の機会としてインドに行かれた。デーリーで開催された主な大会の後、国に帰る途中で国のいろいろな代表たちがカルカッタに来られた時、ベンガル仏教協会が彼等の歓迎のために会を催された。上記の歓迎会において主催されたのは、協会の会長、カルカッタ高等裁判所の主任裁判官ロマプロシャッド・ムコッパッダエであった。カルカッタ大学のパーリ学科の主任教授ノリナコ・ドット博士もこの会で演説された。インドや外国から来た学者グループの中で、日本の代表木村龍寛が上記の歓迎会で、チッタゴンの地方語で演説をして皆を感動させた。会が終った後木村氏は協会のボルア仏教会の数人の知り合いの会員と会うことができて、大変喜ばれた。後日氏は一人で、朝の九時にグレイト・イースタン・ホテルから歩いて、再びベンガル仏教寺院に来て、ドルモパル比丘（現在のマハーテーラ）といろいろなことについて話し合われた。これらすべてのことは、私がドルモパル・マハーテーラ師と木村龍寛氏二人の口から聞いた。

他方木村氏は、ラーマクリシュナとシャミ・ビベーカーナンダの哲学を広めるためにも助力された。一九五八年氏は、日本のラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会の会長の地位を受け入れられた。インドから日本に帰国してから氏は、日本人たちに、タゴールについて、更に生き生きと広められた。

一九六五年十一月二十五日に、木村龍寛は八十三歳の時、天国に旅立たれた。

氏は、印日の文化史の一つの重要な橋をつくられたのである。

氏は英語で八巻と日本語で五巻の本と百の論文を書かれた。それらの中で、ごく特別ないくつかの表をここに掲げる。

一、「インドでの仏教の最後の変革と容易な伝達」
二、「仏教の中心の別の場所」
三、「ベンガルのアジア協会の集められたサンスクリット語の写本　第五巻―仏教サンスクリット写本表の紹介」
四、「大乗仏教の統一運動と仏教タントラ」
五、「シュバシュチョンドロ・ボシュの運動とインドの独立」
六、「初期仏教諸学派の歴史への導入―オシュトシュ・ムッケルジ銀記念祭の巻」
七、「日蓮と妙法蓮華経」
八、「ウパニシャッド」
九、「インドの現代の思想」
十、「インドの階級の普遍性と特別性」
十一、「インドの未来」
十二、「仏陀の悟りを開かれた場所ブッダガヤとその再生運動」
十三、「インド人の性格の特性」
十五、「インドの有史前の物の発掘とドラヴィダ族の文明」
十七、「インドと阿育王の成功」
十八、「インド人の特徴とその未来」
十九、「阿育王の法」
二十、「インドの歴史」
二十一、「小乗と大乗という術語の歴史的研究と大乗仏教の起源」

二十二、「インド仏教の原始的及び発展的教義」
二十三、「仏教とは何ぞや」

付記

ＮＨＫ国際局チーフ・プロデューサー、東京外国語大学講師　渡辺一弘氏に分らない所を御教示頂きました。紙面をお借りして、心から御礼申し上げます。